

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

資料4-13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	用法用量	効能効果
副交感神経遮断成分																				
塩酸ジサイクロミン	レスポリミン錠	アセチルコリンによる痙縮を抑制し、腸管の自発運動、アセチルコリンによる収縮を抑制する。食物の腸管輸送速度を低下させる。	三環系抗うつ薬(抗コリン作用増強(散瞳、排尿障害、心悸亢進、頻脈、便秘、口内乾燥等)、フェノチアジン系薬(抗コリン作用増強)、MAO阻害薬(抗コリン作用増強))					頻度不明(過視調節障害、眼圧亢進、頭痛、頭重感、眩暈、眠気、口渇、便秘、悪心、嘔吐、腹部膨満・不快感、鼓腸、食欲不振、心悸亢進、排尿障害、心悸亢進、倦怠感、脱力感)、視調節障害・眠気等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症		緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心障害、痙攣性イレウス、自動車の運転注意(視調節障害、眠気)			前立腺肥大症、心障害(うっ血性心不全、不整脈等)、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦及び妊娠の可能性、授乳婦、小児					1回10~20mg、1日3~4回経口、適宜増減	下記疾患における痙攣:胃・十二指腸潰瘍、食道痙攣、幽門痙攣、胃炎、潰瘍性大腸炎、憩室炎、痙攣性便秘、小児の嘔吐、胆のう・胆管炎、胆石症、尿路結石症、月経困難症
臭化メチルアトロピン	なし																			
臭化メチルベナクチジウム	配合剤のみ																			
臭化メチルオクタロピン	バルピン錠	鎮痙作用、胃液分泌抑制作用	抗コリン作用を有する薬剤(抗コリン作用の増強)、MAO阻害薬(本剤の作用増強)					頻度不明(視調節障害、口渇、悪心、胸焼け、便秘、下痢、食欲不振、腹部膨満感、排尿障害、眠気、めまい、頭痛、不快感、倦怠感)、視調節障害等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症状、顔面浮腫		緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心疾患、痙攣性イレウス			前立腺肥大症、うっ血性心不全、不整脈、高血圧、肝又は腎疾患、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦又は妊娠の可能性、授乳婦、自動車の運転等(視調節障害、眠気、めまい)				1回10~20mg、1日2~4回経口投与、適宜増減	下記疾患における痙攣および疼痛:胃・十二指腸潰瘍、胃炎、腸炎、胆石症	

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

資料4-13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 蓋用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)重 篤な副作用につながるおそれ	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
臭化ブチルスコポラミン	ブスコパン錠	鎮痙作用、消化管運動抑制作用、胃液分泌抑制作用、膀胱内圧上昇抑制作用	三環系抗うつ薬(抗コリン作用(口渇・便秘・眼の調節障害増強)、フェノチアジン系薬(抗コリン作用増強)、MAO阻害薬(抗コリン作用増強)、抗ヒスタミン薬(抗コリン作用増強)	0.1~5%(視調節障害、腹部膨満感、鼓腸、便秘、排尿障害、頭痛、頭重感、心悸亢進)、頻度不明(口渇)、視調節障害・眠気等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症	出血性大腸炎、緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心障害、麻痺性イレウス、本剤過敏症既往歴、細菌性下痢	前立腺肥大症、うつ血性心不全、不整脈、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦又は妊婦の可能性、自動車等の運転注意(眼の調節障害)	細菌性下痢(治療期間の延長をきたすおそれ)					1回10~20mg、1日3~5回経口投与、適宜増減	下記疾患における応答:胃・十二指腸潰瘍、食道痙攣、胃門痙攣、胃炎、腸炎、腸山痛、痙攣性便秘、胆のう・胆管炎、胆石症、胆道ジスキネジー、胆のう切除後の後遺症、尿路結石症、膀胱炎、月経困難症	
臭化メビジウム															
ヨウ化イソプロバミド															
ロートエキス	ロートエキス散純正	ムスカリン様受容体において副交感神経性及び外因性のアセチルコリンと競合的に拮抗。胃酸又はペプシン分泌抑制、抗ストレス潰瘍作用、胃細胞保護作用、小腸運動または腸液分泌抑制作用、鎮痛作用、血圧降下作用、鎮けい作用	三環系抗うつ薬、フェノチアジン系、MAO阻害薬、抗ヒスタミン薬、イソニアジド(本剤の作用増強)	頻度不明(眩暈、しゅう明、霧視、視調節障害、口渇、悪心、嘔吐、便秘、排尿障害、頭痛、頭重感、めまい、頻脈)、視調節障害・眩暈・しゅう明・めまい等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症、顔面紅潮	緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心疾患、麻痺性イレウス	高齢者、妊婦又は妊婦の可能性、授乳婦、自動車の運転等(視調節障害、眩暈、しゅう明、めまい)						1日20~90mg、2~3回分服、適宜増減	下記疾患における分泌、運動亢進ならびに疼痛、胃酸過多、胃炎、胃・十二指腸潰瘍、痙攣性便秘	
鎮痙成分	塩酸/リバベリン	塩酸/リバベリン散ホエイ	平滑筋の弛緩作用、血管平滑筋の異常収縮を抑制し、血流量を増加。内臓平滑筋を弛緩し、鎮けい作用。	シロドバ(シロドバの作用減弱)		頻度不明(心悸亢進、血圧上昇、めまい、眩暈、頭痛、便秘、口渇、食欲不振、心か即痛、顔面潮紅、発汗)	頻度不明:アレルギー性肝障害、過敏症、(便秘、口渇、心悸亢進)	本剤過敏症既往歴	緑内障、高齢者、妊婦、小児					1日200mg、3~4回分服、適宜増減。高齢者は減量。	下記疾患における内臓平滑筋の痙攣症状、胃炎・胆道系疾患、急性動脈血栓、末梢循環障害、冠循環障害における血管拡張と症状の改
局所麻酔成分	アミノ安息香酸エチル	アミノ安息香酸エチル丸石	胃粘膜の知覚神経末梢を麻痺させ、中枢への刺激伝達を遮断して疼痛、嘔吐を鎮める。			0.1~5%(食欲不振、悪心、口渇、便秘)、0.1%未満(下痢、メトヘモグロビン血症(小児))	頻度不明(過敏症)	本剤過敏症既往歴、乳幼児	高齢者、妊婦又は妊婦の可能性					1日0.6~1g、3回分服。適宜増減。高齢者は減量	下記疾患に伴う疼痛・嘔吐:胃炎、胃潰瘍

